

リレーメッセージ第4回

羽田昭彦氏（北高 27 期）

松江観光協会 観光プロデューサー

「43 年ぶりの故郷松江にて」

10 月初旬、富山県に出張してきました。南砺市城端で開催された会議に出席するためです。いきなりですが皆さん、開催地のこの地名が読めますか？ ぼくは読めませんでした。特に町名は、時間を置くとすぐに忘れてしまいます。

南砺市城端⇒なんとし じょうはな
これが正解です。

では、これはどうですか。

上乃木⇒あげのぎ

松江の人でこれを読めない人はいないでしょう。しかし先日、東京から友人が来て、「上乃木って何て読むの？」そう聞かれてびっくりしました。そうしてみると、松江の地名は難しい。

秋鹿 忌部 雑賀 母衣 千酌 朝酌 芋町 袖師 白潟 馬潟 大海崎 生馬 法吉 手角

芋町の「芋」とはイラクサ科の、背の高い雑草だとか。芋町は江戸時代の松江古地図にも登場する由緒ある町名ですから、宍道湖にほど近い地域には多く繁茂していたのでしょう。でも芋町（おまち）なんて誰が読めます？

旧八束郡の町名もそう（宍道 八束 美保関 恵曇 七類）。いやそもそも、松江の周辺主要都市（出雲 安来 米子 境港）だって、たとえば関東圏の人で全部正確に読める人はどれほどいるのでしょうか。

松江名物「鱒行列」だってそう。ホーランエンヤの「渡御祭」「還御祭」もそう。松江の人は、それが読めて当然という顔をして、フリガナを振ろうなんて考えがありません。

そんな故郷松江に 43 年ぶりに戻り、4 月から松江観光協会という職場で、観光プロデューサーなる仕事を始めました。

北堀の、築 30 年のライオンズマンションで賃貸生活をしています。（松江に三井三菱や東急など大手ディベロッパーのマンションは皆無です。ほとんどが大京穴吹！）

「宍道湖か松江城の見えるマンションで」という妻の希望を、最低限叶えることはできました。部屋から松江城の天守がかろうじて見えます。しかし夏になり、お城の周りの木々が成長すると、天守はほとんど隠れてしまい、妻は黙り込みました。



松江に帰り、最初に驚いたことがあります。横断歩道の前でもじもじしていると、ほとんどの車が停車してくれるのです。都内ではありえないことなので、これは松江市民のやさしさの表れだと思うと誇らしく、都会の友人に宛てた転居のあいさつに、そのエピソードを添えました。

しばらくたったある日、観光協会の常務理事の車で移動したときにそんな話を振りました。すると、彼はちょっと小馬鹿にしたような表情で言い放ちます。

「(島根) 県警の取り締まりが厳しいからですよ。横断歩道を人が渡ろうとしていたら、止まる。道交法にも書いてあります。その人に渡る意思があろうがなかろうが、とにかく止まる。(市役所前の) ここでそれを無視して走り去ろうとして捕まった市の職員は何人もいますよ」

なんだ、松江のドライバーは親切というより、キップを切られるのを恐れていたのです。このエピソードを綴ったメールは、配信前にゴミ箱行きになりました。

次に驚いたのは、「〇〇してもらおうと喜びます」という表現を聞いたときです。ご承知のように、この場合、喜ぶのは自分です。つまりこの表現は、「〇〇してください」、そうすることで「私を喜ばせてくれ」とまあ、何ともおおらかな命令をしているわけです。昔、確かに聞いたことのある、とても懐かしい響きでした。ただそれを妙齢の女性が発していたので、不思議な感じがしたものです。

出雲弁(松江弁)をしゃべる感覚を少しずつ取り戻したころ、いまは広島にいる母親の携帯に電話しました。母親は生粋の松江人なので、思い切って「どげだかね?」と切り出してみました。

「どげだかね」

「はあ〜?」

「どげだかね」

「あんた、誰?」

「昭彦だがね」

「わしゃ騙されんよ」

電話は切れました。

そんな日常を過ごしています。(どんな日常なの? ←自分のツッコミ)

で肝腎の、観光プロデューサーってどんな仕事か? それはまた別の機会に(♥)。

2019年10月31日掲載